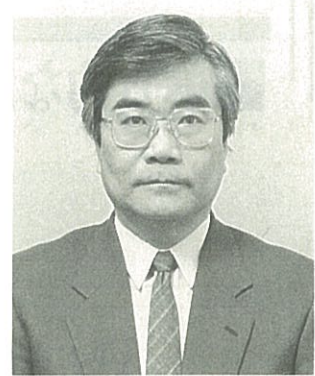




日本原子力研究所理事
飯泉 仁

起業家としての 研究者



当たり障りのないことを書けばよいであろう巻頭言に、高尚な研究をやっておられる方には目障りなことを、あえて書いてみよう。

それは、研究は一種の「起業」であり、研究者には起業家 (entrepreneur) の心がけが必要だということである。

研究は自由な発想でやるものであり、見いだされたものの筋道に従い、自由に展開するものであり、マネジメントなどというものは、おおよそ不要であるとの論がある。それに対し、研究は起業であり、マネジメントが肝要であると、私は主張したい。

基礎研究は、小さなベンチャービジネスを企画し、会社を起し、発展させることに匹敵すると言いたい。何をもちてビジネスを始めるか。既存のビジネスにない、新しい着眼点は何か。何をリソースに会社を起すか。競争相手と戦う戦略は何か。どの会社と連携するか。いろいろな困難にぶつかり、思惑通りにいかないなかで、どのような対策を打つか。転身、展開を図るか。この仕事には誰を当てるか。要員はそれぞれ、十分力を発揮しているか。うまく行きだしたとして、次に打つ手は何か。うまく行かないとしたら、どこで目処を付け、撤収を図るか。

こんなことを、新たにベンチャービジネスを始めた起業家は、厳しい起業環境のなかで、死にもものぐるいで考え、日夜行動していることだろう。

研究についても同じことだと思う。研究者個人として、あるいはグループとして、ベンチャーと同じくアイデアと、それを実現させる戦略的マネジメントと、行動とが必要なのだと思う。

ビジネスの世界では、勝負のルールと勝敗は判然としている。儲かるかどうかである。研究の世界でも、物差しの違いがあるとはいえ、本質は同じだと思うが、勝負は多分に主観的であり、時間が掛かり、それ故に判然としていない。日本的甘えの風土では、そこら辺が一層曖昧にされる。最初から勝負を避け、自分の穴を掘って、自己満足している場合もある。勝負を回避している人が、往々にしてマネジメント不要を唱える。

基礎研究者は、もっとビジネスマインドを持ち、ビジネスの厳しさに学ぶべきだと、常日頃感じているのだが、いかがであろうか。